

批評・紹介

中國基督教史綱 王治 心著

民國二十九年三月、上海青年
協會書局發行、菊判三六一頁
書目四頁、一元五角

支那基督教史 比屋根安定著

昭和十五年七月生活社發行、
四六判三二四頁、一・八〇

東洋文化史上の基督教

溝口 靖夫著

昭和十六年三月、理想社發行
菊判四五〇頁索引四頁、三・

八〇

支那に於けるクリスト教の傳道史は決して一貫した脈絡のあるものではない。唐代にネストル教が傳へられたのを初めとして、元代にはネストル教が再び流傳したほかに、ローマ・カトリック教も新たに傳へられ、また明末に至つてカトリック教が再び渡來し、清代にはプロテスタント教諸派が新たに渡來し、ほかにギリシア正教も流入した。かやうに正統・

異端の諸派が様々な時代に夫々獨自の事情から支那に流傳し、そのあるものは內的の、あるものは外的の事情によつて支那から姿を消して行つて、しかも夫々の間には相當の間隙の時期があつて相互の間の聯繫が認められない。かやうなわけで、これら諸派を綜合した一篇の通史を書くことは甚だ困難なことであつて——困難といふよりは、むしろ、支那に於けるクリスト教史としてこれら悉くを一つのものとする自身が大變無理なことではないかと考へてゐる——かやうな通史の類の良書は極めて乏しく、ことに邦文及び漢文では今までこれを扱つた專著がなかつたと言つてよい。ところが、最近に至つてこの三冊が相前後して發刊せられた。斯界のために慶賀すべきことである。

三書全部について言ひ得ることは、いづれも粗雑低調であることである。新舊諸派を合併した一の通史を書くことは夫々の國語では初めての試みであつて、こゝまでに至るには著者たちの苦心の大抵でなかつたことは充分察するのであるけれども、遺憾ながら何れもその出來榮え

については賞讃の辭をおくることを躊躇せざるを得ない。それをとり上げること、すぐれた著作のみをとり上げて論評するといふ本誌の趣旨に反する如くでもあるが、一面、これら著者たちの創始の功は高く評價しなければならぬ所であつて、敢てこゝに紹介の筆を執る次第である。

およそ通史とか概論とか云つたものは一番手の研究の結果を集成した二番手の著作となることは當然のことである。たゞ、この二番手の編纂ものが優れたものであるためには、その材料となる一番手の研究が著者自身の手になるものであるか、さうでなくとも第一流の研究をとり入れたものでなくてはならない。われわれに近しい支那史の概説を引合ひに出せば、岡崎博士の「支那史概説」が高く評價せられるのは、偏にこれが著者の根本史料についての研究に基づいて書かれたものであるからであり、また和田博士の「支那」(東洋思潮)が注目せられる所以の一作は最新の研究がよく集羅引用せられてゐることにある如きである。ところがこの三書ともに、すぐれた一番手の研究

に據つた箇所はあるにしても、全體から云つて二番手、三、四番手の不適當な材料に據つたり、重要な研究を逸してゐる場合が多いのであつて、二番手の著作と稱し得ない低調なものとしてゐる。(勿論三者の間に甲乙はあるが)。

次には體例である。三書を通じて言へることは、體例の不手際が、さきの材料の選擇の良くなかつたことと相俟つて、結局に於て「支那に於けるクリスト教の通史」を書くことに成功したとは稱し難い有様になつてゐるのである。つまり、かやうな通史に於ては、章節の區分と叙述の繁簡の宜しきを得ることが最も大切なのであるが、著者はいづれも新教關係の人であるためか、近代プロテスタントの開教に關することだけがよく書かれてゐて、その他は概して貧弱である。現狀に重きを置き、時代を溯るに従つて叙述を簡略にするのは當然のことであるが、さうするならばカトリック教にも相當の考慮が拂はれねばならない。徒らにプロテスタントの近狀現況のみに重きを置くことは通史として許されぬ所である。

その次には、稍細かなことになるが、

間違ひが多く眼につくことである。その多くは、王氏に於ては西洋の固有名詞に關する誤りや、歐文の誤讀に基づくものであり、日本の二氏、特に比屋根氏に於ては著者の支那學上の準備の不足に基づくものである。

以下發行順にそれぞれについて述べよう。

第一の王氏の書は、三書のうちで最も體例が好いと言へるであらう。すなはち近代・現狀に詳しく、古い所ほど簡略にするといふ建前をとつてゐる。しかし、それが度を失して、古い所——元以前の傳道史についても準備が充分でなく、「南京教難」のために一章を設けながら、そのほか大小數百件の教案に關しては數行の記事があるに過ぎず、「道光以後天主教的復興」なる章も些か見劣りがするなどが難と言へよう。たゞ、それでも近代カトリックに關しては、他の二書よりはまだ好い。

第二の比屋根氏の書は、事柄を多く、言葉を少くといふ方針で書かれた様に見うけられる。この點、小冊に多くの事項

をよく收め得てはゐるが、一面、叙述が表面的に流れ固有名詞の羅列に近い無味乾燥なものとなつてゐる。しかもそれが元代以前及び近代カトリックについての部分の失敗は前者より甚だしく、ことに著者の支那學上の準備の充分でないために、本書の初め數章は全く駄目である。章節の區分法は本書が最も劣るけれどもたゞギリシア正教のことは他の二書が漏らしてゐてこれにだけ扱はれてゐる。なほ、本書には引用書目がない。

第三の溝口氏の書は、今までことわる機會がなかつたが、支那だけのクリスト教史でなく、ペルシア・インドのことがその書の前半部で扱はれてゐる。私はこの前半部については云々する準備が全くないので、今まで言つて來たことも、専らこの書の「第三篇、支那」について言つてゐることを承知願ひたい。

ラトゥーレットの「支那クリスト教史」を骨子としてゐる様に見うけられるが、それに配合した諸材料には、餘りよくないものが多く見うけられ、ことに、支那史料を殆んど全く利用してゐないことは大きな缺點と言はなければならない。近

代カトリックの部分はやはり感心しないが、元代以前の部分は他の二書よりはよく、この類の書によく見うけられる奇矯な言説にあまり惑はされてゐない點で、この著者の批判的態度を買ふべきであらう。

〔藤枝光〕

支那史學に現はれたる

倫理思想

神田喜一郎著

岩波講座倫理學第十冊

この論文は二部分から成る。

一、「支那史學の倫理的 성격」では、先づ史通を引いて、史學の目的と效用とは事實を直書して勸誡に資することであり、此は支那史學の根本理念であるとされる。そしてこのことを正史の忠義傳、孝友傳、列女傳等、またはそれと對立する姦臣傳等によつて立證されるのである。

この場合、勿論時代によつて思想の推移することを認められ、例へば忠義傳を見ると、晉書では、忠義の士とは一般に節義を守つた者を指すが、宋史では、君臣間の節義を守つた者となり、また唐以前の諸史には孝友傳が忠義傳の前にあるが、以後の諸史ではその反對であること

などを指摘して、それは唐宋以來帝王の權威が強くなつて來た思想上の變化を示してゐる、と説かれる如きである。正史のみではなく、漢紀、資治通鑑などもこの勸善懲惡を目的とするもので、それが朱子の通鑑綱目に至つて徹底する。

然らばこの支那史學の倫理的 성격は如何にして生ずるかと云へば、それは支那の史學が春秋から發足することに由來する。大義名分を正すといふ孔子の理念が春秋の根本理念であり、そこから正邪善惡に對する褒貶が生ずる。従つて春秋を理想とする司馬遷の史記、それに續く諸史に於ては、一つの獨立した専門の史學として認められるに至つた後、遂に春秋學の囿絆から解放されず、春秋學の實踐的目的性の支配を免れ得なかつた。

以上が前半の大意であるが、支那史學の倫理的 성격としてその勸誡主義を捉へ一貫して展開された論旨は明晰である。然し春秋は國家、社會、天道との關聯に於て記されてゐるのに、史記以下には個人の言行が著しく前面に浮び出てくる。その變化は如何に説明すべきか、全く不明である。これは單に形式だけの問題で

はない。その説明として、左傳、國語、戰國策について一言を費すべきであつたと思ふ。ともに大義名分（この意味も充分明かではない）をあらはすことに變りはないとしても、そのあらはし方に變りがあることが注意せられてよいであらう。また忠義傳、孝友傳は晉書、宋書以後設けられたが、その理由も述べてほしかつた。もつとも金井之忠氏著「唐代の史學思想」には、少し説明してある。

二、「正統論」は四千年間に代興せる諸王朝の正閏に關する議論の展望である。これはたしかに支那史學に顯著にあらはれる倫理思想である。はじめて秦を即位として帝統に正閏を區別した張蒼の説、その他五德の運の相承による正統論、魏吳蜀三國についての陳壽、習鑿齒、劉知幾等の正統論、東晉、元魏についての皇甫湜の正統論、また五代の梁に關する李昉、薛居正、歐陽修、章望之、蘇軾の正統論、それらが次々に唱へられ、朱子の通鑑綱目に至つて結論に到達する經過がその思想的政治的背景とともに、要領よく述べられてゐる。然らば、かゝる正統論が支那史學界に大問題として常に繰返